

研修を通じて地熱開発の機運を高めたい



JICA九州
研修業務課
緒方 理恵
OGATA Rie

大学卒業後、民間の旅行会社に勤務。その後、大学の国際交流センターの職員を経て、2013年にJICA九州に就職。地熱開発分野を中心に、研修の管理運営に関するさまざまな業務に携わる。

JICA九州で4年間、地熱開発に関する研修に携わってきた緒方理恵さん。現場で研修員の生の声を吸い上げ、自らも共に学ぶ姿勢を大切にしている。世界の地熱開発の発展を支えたい——企業や自治体も協力し、九州一丸となった研修が展開されている。

現場で生の声を聞く

国際協力に関心を持ったきっかけは、小学生のときに読んだマザーテレサの本です。それ以来、世界の出来事や日本と異なる文化を知ることが好きになり、海外への興味をずっと抱いていました。大学を卒業して社会人として働きながら、オーストラリアで取得した国際関係修士を生かせる仕事は何かと模索していたころ、JICA九州で職員を募集していることを知り、思い切って応募したのです。

2013年に晴れてJICA九州の研修業務課に所属することになり、さまざまな研修の実施計画の立案から、準備、調整、評価までを担当しています。中でも力を入れてきたのが、私が4年間担当している地熱開発分野の研修です。国内有数の地熱発電所を擁する九州の強みを生かして、JICA九州では地熱開発に関する多彩な研修を行っています。

常に心掛けているのは、自分自身もできるだけ研修現場に立ち会うことです。研修の委託先の担当者から報告を聞くだけでは、研修員の様子や反応までは分かりません。研修員の生の声を聞き、それを次回に反映させることができるのが、この仕事の面白さだと感じます。また、研修員によっては語学力を理由になかなか発言できない人も

シオンを持続させることも、私にできる大切な役割です。

一方で、地熱に関する専門知識を身に付けるのは苦労しました。地熱やエネルギーについて専門的に学んだことがなかった私にとっては耳にする単語全てが新しく、初めは研修の管理運営は何とかがこなせても内容には全く付いていきませんでした。それでも、研修員と一緒に講義を聞いたり、講師の方に教えてもらったりしながら、少しずつ地熱のことを学ぼうちにだんだんと面白さが分かるようになり、今では「次はもっと良い研修にしたい」という思いを持って自分なりにカリキュラムを考えています。

九州の強みを生かす

昨年度から新しく行っている「地熱エグゼクティブ」「地熱資源エンジニア」「掘削マネージメント」の3つの研修コースは、私が立ち上げの段階から関わったので、特に印象に残っています。研修がどのようにして作られるのか、どのようにして周囲の関係者を巻き込むのかなど、多くのことを学ぶことができました。

通常は1カ月から2カ月ほどの研修が多い中、アジア、中南米、アフリカの中堅エンジニアを対象にした「地熱資源エンジニア」では、半年にわたり研修を行います。研修員の適性や理解度も異なるため、最終的に全体でどのような成果を出せるのかわ

安もありましたが、最後の発表会で研修員から母国の地熱開発を背負って立つ決意を感じ、胸が熱くなりました。

この研修は、九州大学、九州電力、西日本技術開発をはじめとする多くの企業や自治体などの協力があつて

こそ、実現できたものです。九州には、地熱開発に必要な資源探査から発電までの経験がありますが、それだけではありません。地熱開発の経験を世界に伝えるために協力し合う風土があり、その協力の輪こそが九州が持つ強みだと思います。

地熱の研修を担当するようになって、自らの専門性を突き詰めている方々との多くの出会いがありました。私にとってそれは刺激的なことであり、恵まれた職場環境だと思っています。それと同時に、自分の仕事に国際協力の一端を担っているという責任の大きさも感じます。クリーンエネルギーである地熱の開発が、日本だけでなく世界で進むように、今後も研修を作る立場からサポートを続けていきたいと思っています。



昨年度始まった研修「地熱エグゼクティブ」を終えた研修員たちと緒方さん(一番右)。研修員は皆、安堵と自信に満ちた表情をしている



地熱開発の研修に同行し、秋田県湯沢市の掘削現場を訪れた緒方さん。ケニアの研修員と共に